
ザ・超能力探偵

あどん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザ・超能力探偵

【Nコード】

N6659J

【作者名】

あどん

【あらすじ】

俺の名前は神泉遼。正義の超能力探偵だ。未来を見、人の心を読むことで俺はどんな難事件もたちどころに解決してきた。

これは、俺が今までに解決した事件の一つ、愛と感動の物語だ。

注意：ラストが書きたかったです。ごめんなさい。

俺の名前は神泉遼。全国各地を飛び回り、生まれ持った超能力で、
たちどころに事件を解決へと導く正義の私立探偵だ。

今朝、俺は目を覚ますと愛車のフェラーリのアクセルを全開にした。高速で後ろに流れる景色、俺の頭をなでる冷たい風の中、俺はついさっきのことを思い出す。

未来視。未来で起こる出来事を前もって知ることのできる能力のことだ。俺は新〇の母のように目が覚めた状態でこの能力を使うことはできないが、夢の中で、俺は未来に起こる出来事を詳しく知ることができる。今朝の夢は、俺の住まいから西に100kmほど移動したところにある古い館での出来事についてのものだった。

人里離れた海沿いの大きな洋館、そこで起こる惨劇、真つ赤な力
ーペットを被害者の血がどす黒く染め上げる。一体誰が？ どうし
て？ 恐怖に駆られ皆が悲鳴を上げ混乱する中、さっそうとひとり
の男が現れる。その名は神泉遼。正義の私立探偵だっ！

[illegible]

「遅かったか」

すでに洋館の中は悲鳴で満ちていた。海のほうから流れてくる黒雲や打ち寄せる高波が、洋館の不吉な雰囲気を醸し出す。俺は血がたぎってくるのを感じた。みんなが俺を呼んでいるっ！

俺は大きな扉を体ごとぶつかってこじ開け、高らかに宣言する。

「西に事件の兆しがあれば、ただちに駆けつけ未然に解決！」

東に未解決事件があれば、ドライブがてら、さくつと解決！

犯人よ、あきらめて投降するがいい。お前にもはや逃げ場はないぞ！ この正義の超能力探偵、神泉遼に見つかったからにはなっ！」

おびえる視線が俺に注がれる。無理もない。初めて死体を見たとき

なれば誰でもそうなる。

俺はその場をすばやく観察し、記憶する。

エントランス中央に大の字に倒れているのは被害者にしてこの館の持ち主、高田俊平。

俺の向かって正面、中腰になり、高田氏の脈をはかっている初老の男が執事、大里隆司。

鼻に指を当て、高田氏を横から観察している高校生の少年が客人、金田悠。

金田に後ろからすがりついているのがその幼馴染、狩野京子。

ふむ、役者はそろっているようだ。俺は、啞然とした表情で俺を見つめる彼らに告げる。

「犯人はこの中にいる」

「まず、執事の大里さん」

「はい、なんでしょうか？ それからなぜ私の名前を？」

大里が落ち着かない様子で俺を見る。彼は白だ。

「名前のほうは後からだ。確認するが、館のオーナー、高田俊平さんはお酒に弱いようだ」

「は、はあ。さようでございます。ビールほどの強さでも、缶一杯で泥酔してしまうようなお方でした」

「次に、金田さん」

「……」

睨むような表情。明らかに俺を警戒している。ふん。

「昨日の晩、高田さんはどのくらいお酒を飲んだか」

「さあ」

「そうか」

彼にかまっている暇はない。

「最後に、狩野さん」

「は、はいっ！」

彼女だ。犯人は。

俺にはすぐに分かる。おびえる表情。そわそわとした体の震え。俺が今までに追い込み、時に捕まえ、時に見逃した犯人たちは皆、俺にたいしてそのような反応をした。

「お前のアリバイを教えてくれ」

「待てよ」

おびえる狩野の前に、金田が割り込む。

「お前、京子を疑ってんのか!？」

「そうだ」

「何を根拠にっ!」

「ふん。俺は知ってるだけさ。何があつたかをな

この事件は、いや正確には事故だ。そうだな、狩野さん？」

狩野が恐怖に目を見開く。

「……嘘よ」

「嘘じゃない。君は昨日の晩、酔ってふらふらになった高田氏に言い寄られた。今晚一緒にどうかと」

「う、嘘よ」

「そして、もみ合っているうちに高田を」

「黙れっ!」

金田が俺につかみかかる。血走った眼が俺を食い殺そうと光る。

「放せ小僧」

「ふざけるな」

金田が息をすう。

「お前が犯人だ」

シーン、と館は水を打ったように静まりかえる。

滑ったな。俺は冷静に金田を見つめる。

「冗談にしても程度が低いぞ小僧」

「冗談じゃないさ」

金田がにやりと口角を釣り上げる。

「まず、いくつかの疑問がある。

ひとつ、なぜお前はオレたちの名前を知っているのか。

ひとつ、なぜ高田さんが殺されたことを知っているのか」

なんだ、そんなことか。俺はあきれつつも最低限の礼儀として答える。

「言っ
たろ
う。俺は」

金田が遮る。

「簡単なパズルだよ。オレたちは警察はおるかこの館の外部に連絡ひとつとってはいない。つまり、高田さんが死んだことを知っているのは、ここにいたオレと京子と大里さん。それから犯人だけだ」

俺以外の全員が、俺を疑いのまなざしで見つめる。

「ま、まで話を」

「初めの疑問。なぜお前が俺たちの名前を知っているのか。それはお前が昨日のパーティーにいたと考えれば辻褃があう。パーティーには大勢の人が来ていたからな。お前がいたかなんて分かりっこない。お前は昨日の晩、高田さんを殺害し、館を後にした。そして今日。何食わぬ顔で戻ってきたんだっ！」

「待つんだ。話を聞いてくれ。俺は超能」

「お前が高田さんを」

「ひ、ひどいわ、信じられない……」

「大里さん。警察に連絡を」

「分かりました」

なんということだ。このままでは俺が犯人にされてしまう。

「観念しろ」と金田。

「遼ちゃん。ありがとう」抱きつく狩野。

抱き合う二人。

しかし、絶体絶命の状態にあつても俺は慌てない。俺は正義の超能力探偵神泉遼。悪に屈するわけにはいかないのだ。

「お笑いだな。ふ、ふわはははははっ はははっ！」

「何がおかしい」

「お前だ。お前たちがだよ金田少年。

君は本当のことを知っているのだろ。誰が高田さんを殺したのか」

「お前だ」

「違う。狩野だ」

びくつと、狩野が震える。

「高田を殺し、どうしていいかわからなかった狩野はすぐに金田、お前を頼った」

「くっ…何を根拠に」

「だから何度も言っているだろう。俺には分かるのだよ。俺には超能力があるからな。」

お前は狩野をかばうために俺を利用したんだろ？ 俺を犯人に仕立て上げることで狩野をかばおうとした。違うか？」

「……」

「だがな。金田少年。それで狩野が救われるとでも？ 彼女は一生人殺しだぞ。一生十字架を背負い、昨日のことを後悔して生きていくんだ。なぜそれが分からない？」

俺の言葉は沈黙を生んだ。うつむく二人の若者たち。

俺は黙って時の流れに身をゆだねる。

無機質な、掛け時計の音が時間の流れを意識させ、遅くする。

そして、

それを乱したのは狩野だった。

「……遼ちゃん……もう」

決意に満ちた表情で、ゆっくりと口を紡ぐ。

しかし、

「それでもいい」

金田が絞り出すように言う。

「それでもいい。それでも、オレはお前に一緒にいてほしいんだ。いなくなつて欲しくないんだっ！」

「……遼ちゃん」

狩野の瞳から大粒の涙がこぼれる。ひしと抱き合う二人。
塩辛く、温かな、煩わしく、やさしい雫。それが俺の頬を伝い、
俺は満足した。

黙ってその場を後にした。

ノックの音が、俺の事務所に響く。

俺は正義の超能力探偵。また今日も新しい事件が始まる。

「入れ」

「すみません、警察ですが」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6659j/>

ザ・超能力探偵

2010年10月8日14時38分発行